

研究題目

持続可能な開発目標（SDGs）を取り入れた伊豆地域におけるビジネスモデルの指導方法の研究

研究報告

- 1 学期 1. SDGs について学習
2. 伊豆市の課題について講義
- 2 学期 1. 市場調査（伊豆市の獣害被害）
2. 革製品の開発（立案）
- ①しおりを作成し、生徒へ配布 使い心地アンケート調査（予定）
工業科へ依頼し大量生産
 - ②品質の保証を目指した製品制作を目標にキーホルダー作成を立案
卒業生へは記念品として付加価値を付けて贈ることを検討し、在校生へは
サンプルの提供として使い心地に関するアンケート調査を実施することが決まった。
 - ③商品化（市場への流通）を目指した計画の立案
（ターゲット、コンセプト、販売経路、販売促進等の検討）
- 3 学期 製品の制作

助成金の使い道 鹿革、加工道具等の購入

内訳	抜型	¥1,870	鹿革	¥17,600		
	焼印	¥9,790	ラッピング用小物	¥660	計	¥29,920

生徒に付けたい力

地域や社会の課題を自分事として捉え、社会の一員として今何ができるのか解決策を検討し、実行に移す力

達成状況

生徒たちが SDGs への理解や関心を深め、自身に何ができるのかを検討することができた。伊豆市役所や地域おこし協力隊、革加工に詳しい方に講義を依頼し、地域の現状や課題、「いただいた命」への責任などを肌で感じる経験をした。特に、講義の中で、陸の豊かさを守るためには森林の整備や温暖化防止への対策だけでなく木を枯らす原因の一つである害獣（鹿や猪）を適正頭数に戻し共存する必要があることを知った。そして、イズシカ問屋という施設の稼働により、害獣とされている鹿や猪を食肉加工する体制は整っている

が、皮はほとんど利用されることなく捨てられていることが分かった。

そこで、廃棄物となっている鹿の皮を市場に出回らせるためには、何が必要であるのかを検討した。生徒たちは、学習のなかで生の皮が加工され、革になるまでの工程には多くの時間と費用がかかることやあまり需要がないことに気づき、需要拡大のためには鹿革の良さを広めることが重要であると仮説を立てた。仮説の立証に向け、製品の制作後、学校内にて無償配布を行い、使い心地などに関するアンケート調査を行うことが決まった。

本校は、総合学科と工業科の併置校であり、総合学科の「商品開発（2単位）」という授業のなかで工業科建築デザイン類型の「デザイン材料（2単位）」と連携し、しおりの制作を進めた。総合学科の生徒が、現状と解決策、工業科への大量生産依頼をプレゼンテーションし、工業科の生徒たちがそれを受けて制作するというものであった。しかし、手作業で行うため、品質や作業スピードに差が出てしまうという課題が見つかった。そこで、見つかった課題や残された時間を考慮し、抜型を使ったキーホルダーの制作を行うこととした。配布時期の変更により、朝読書でのしおりの利用よりもキーホルダーの方が利用頻度が高いと判断したためである。アンケートに向けたサンプルの配布が主であるが、3年生へは卒業記念という形をとることにより、商品開発のターゲットやコンセプト、パッケージデザインなどの検討も実践的な学びの場となった。

感染症対策の一環としての臨時休業に伴う影響が多くあり、年度内での使い心地に関するアンケート調査は断念せざるを得ない状況であるが、今後も制作を進め、年度内での配布を目指している。また、地域という身近な場にある課題のため、生徒たちは非常に意欲的に学習に励むことができた。革を加工する際も、SDGsを念頭に無駄なく作業に取り組んでいた。単元により、地域課題を扱わない時間であっても、SDGs目標の達成を目指した提案をする生徒が多く、生徒一人ひとりが地域社会の一員として、また、将来社会に出て企業人として活動することを意識して活動に参加していた姿が印象的である。アンケート調査等、到達できなかった部分については、次年度の学年へ引き継ぎ、仮説の立証や市場への流通に向けた提案を行いたいと考えている。



地域おこし協力隊講義



しおり制作（体験）



抜型を利用したキーホルダー作成